

日本文藝家協會編

代表作時代小説

第十九卷

編纂委員

尾崎秀樹

武蔵野次郎

和田芳恵

村上元三

山岡莊八

普及版 第十九卷

代表作時代小説 定価一三〇〇円

昭和五十七年十月十五日 発行

編纂者 日本文藝家協会

発行者 角谷かをり

発行所 株式会社東京文藝社

東京都新宿区払方町一番地
振替・東京六一二一七五七
電話・二六〇二五五〇

ISBN4-8088-3076-0

無検印承認

まえがき

村上元三

十年前の「代表作時代小説」の目次と比べてみると、ずいぶん作家の顔ぶれが変わっている。物故した人もあるが、編集会議のとき、なるべく新しい作家を、というのが毎年の方針なので、これはこの後も守って行くことになるだろう。

時代小説の衰微ということが、何年も前から言われているが、なるほど雑誌の目次面では少くなっている。時代小説の書き手が減った、と言う人も多いが、しかし内容は衰微していないと思う。

戦前は、二十代で時代小説の畑で仕事をしていた作家も多かったが、このごろは、だいたい四十代の作家が一ばん活躍していることになる。読者の嗜好も変わってきているだろうが、さて、こうやってこの一冊に含まれた作品を見ると、傾向はさまざまだが、いずれも作家がちゃんと腰を据えて書いているのがよくわかる。

この「代表作時代小説」が、日本文芸家協会の中で毎年売行きが一ばんよく、発行部数も減っていない。それでうぬぼれるわけではないが、毎年新しい作家が出てくれるのは、なによりうれしい。

発刊以来、この「代表作」の編集にたずさわっているわたしなど、いい加減に引っ込ん

でも、よさそうなものだが、わたしはわたしなりに、時代小説に新しい畑を切り拓こうという努力を捨てていないし、ほかの古くから時代小説一本槍でやっている作家も、同じだと思う。そして、新しい作家が毎年、一人でも二人でも出てくれるのは、自分たちにとってもはげみになる。そのためにも、この「代表作時代小説」を刊行する意義がある、と信じている。

目次

宿世の縁	相模国百姓おまん	仲秋十五日	泣かぬ半七	橋を渡って	賈者助太刀	大楽源太郎の生死	七里の渡し月見船	蟹眼の大事	妻よ許せ	半次郎と長吉	姓名判断	あの橋を渡るとき	稲妻
陳舜臣	武田八洲満	滝口康彦	杉本苑子	陣出達朗	柴田鍊三郎	司馬遼太郎	笹沢左保	早乙女貢	五味康祐	川口松太郎	小田武雄	伊藤桂一	池波正太郎
二五九	二五〇	二三三	二七	二五	二五	二五	二三	二五	二	二	三	七	七

振袖と刃物	戸板康二	三三
檻の中	戸部新十郎	三五
巴里北停車場	永岡慶之助	三五
孫太郎漂流記	南條範夫	三六
黍団子侍	新田次郎	三六
紙の城	星新一	三六
ボロ家老は五十五歳	穂積 驚	三六
釈迦浜心中	水上 勉	三七
河童役者	村上元三	三八
宮本武蔵の女	山岡 莊八	三八
笹ノ目万兵衛門外へ	山田風太郎	三八
神田無宿徳松	和巻 耿介	三九

まえがき 村上元三
あとかき 武蔵野次郎

作者のことは

この小品は、或夜、テレビの深夜番組で、アメリカ映画（どんなものだか忘れてしまったほど、つまらなかった）を見ていると、雷鳴のシーンが画面にあらわれた。

そのとき、先ず別冊文春にたのまれていた小品の題名を「稲妻」とつけてしまった。

題名が先についたのは、私にとって、めずらしいことであった。それから「稲妻」の二文字から放射してくるイメージを追いつめて、或日の午後には、書き出しの二行が決まった。

大正十二年一月二十五日東京生れ

品川区荏原二―一―二 丁 142

日本文芸家協会会員

「錯乱」にて第四十三回直木賞受賞

主著―「鬼平犯科帳」

稲

妻

池波正太郎

1

このごろの水谷宗仙は、毎朝、雨音に目ざめる。

梅雨に入ってから、ずいぶん日（ひ）がたったような気がするけれども、

「今年の梅雨は、それにしてもひどいものだ。鉢（か）中に苔が生えてしまうよ」

町の人びとは、げっそりとなっている。

だが、宗仙にとって、雨の日は、

（ところが安らぐ……）

のであった。

一年中、

（雨（あめ）つづきでも、かまわぬほど……）

なのである。

雨の日には、人の往来がすくない。

宗仙を、

「親（おや）の敵（かたみ）」

として、探（たづ）しまわっている和田勝之助・平馬兄弟の眼

も、雨の日には、

（光（あ）るまい）

からだ。

また、いまは、江戸の町の片隅で医者になつてゐる水谷宗仙自身も、外出のときには、自然に傘で面（めん）体を隠す

ことができる。

十年前までの宗仙は、名（な）を谷山昌順（たにやま しょうじゅん）といい、丹波・篠山（たけのやま）五万石、青山（あおやま）下野守（しものかみ）につかえる医者であつたが、同じ家中（うちやう）の和田武兵衛（わだ ぶへい）を殺害し、篠山の城下（じやうげ）を脱走したのであつた。

殺害の理由は何かという、まことに下らぬものなのだ。

二人で碁（い）を打（う）つていて、勝負の争いから、喧嘩（けんか）となつたのである。

そのときのことを、宗仙は、よくおぼえていない。

場所は、宗仙の屋敷の奥座敷で、気がついて見ると、宗仙は武兵衛の脇差（わきさし）をうばつて引き抜き、武兵衛の胸下へ突き刺（さ）してゐた。

武兵衛は、大刀（たて）を半分ほど抜きかけたままで、息絶（いき）えていた。

冬の夜であつた。宗仙は、その場から金をふところにし、無我夢（むがゆ）中で屋敷を逃げた。

当時（たうじ）二十九歳の宗仙は、妻（つま）のみなを病（や）いでうしなつてから二年（に）目のことで、後妻（こうさい）を迎（むか）へるための縁談（えんだん）が進行中（しんこうちゆう）だったのである。

そのときから十年の間に、水谷宗仙は一度も、自分を父の敵（かたみ）としてつけねらう武兵衛の遺子（いし）・勝之助（かつのすけ）と平馬兄弟（へいま けいだい）に出会（であ）つたことはない。

こちらも必死で、諸国を逃げまわったものだが、和田兄弟も同様に、懸命となつて宗仙を追いつづけているにちがひなかった。

水谷宗仙が江戸へ来て、下谷・坂本三丁目の小野照崎神社裏に一戸をかまえてから、今年でちょうど二年になる。

宗仙は、ひとりきりで町医者者の暮しをつづけてきた。(食べて行けるだけでよい)

だから、つとめて地味にやってきた。

評判がよくなると、どうしても人びとの口にのぼる。それは、危険きわまりないことであつた。

なかなか、むずかしい。

小さな家の掃除やら食事の仕度は、表通りの、古着屋の女房がしてくれる。

その日の夕暮れになつて……。

三ノ輪の裏の百姓・伝五郎の家へ往診に出かけた宗仙が、坂本の家へ帰つて来た。

この近辺の、ささやかな町家や、百姓地に、宗仙の患家が多い。

そのほうが、万事に目立たなくてよいのである。

坂本三丁目の東側にある小野照崎明神は、坂本町の鎮守になつてい、社も小ぢんまりとしたものだ。この裏手の草地の一角に、水谷宗仙が住むわら屋根の家がある。

この家は、近くの正覚寺しやうかくの持家だそうで、台所のほかに三間の小さな家であつた。

表通りは、上野山下から三ノ輪、千住を経て奥州街道へつながる往還だけに、びっしりと商家や飲食店が軒をならべ、日中は人通りが絶えぬ。

だが、一つ裏手へまわつた宗仙の家のまわりは、ほとんど寺院ばかりだ。

その向うは、いちめんに入谷田圃たはと木立がひろがり、田圃そのまゝの風景である。

家の中に、灯りがともっていた。古着屋の女房は、もう帰つたはずだが、夕飯の膳ごしらえをしたついでに、行燈へ灯りを入れておいてくれたのであらう。

家の前の道へ来て、宗仙はあたりへ眼をくばつた。これはもう、十年來の習慣として身についてしまったものだ。

表戸は閉まつている。小野照崎神社の境内と垣根をへだてた裏口の戸が開けてあるはずであつた。

雨と夕闇がたちこめる裏手へまわつた水谷宗仙が、傘をすぼめながら石井戸の傍をまわりかけ、ぎふつとなつた。

裏口の軒下に、黒い影がひとつ、佇たすんでいるのを見たからであつた。

その黒い影が、笑いをふくんだ声で、宗仙にこうよび

かけてきた。

「先生。ずいぶんと久しぶりでございますねえ」

かすれていて男のようなささやき声だが、まぎれもない女であった。

2

この女は、名をお喜代^{きよしろ}といい、水谷宗仙^{すゐたけのむねけん}が国もとにいた十年前のころ、おなじ篠山藩^{しのやまはん}の足輕・井関藤七^{いせきとうしち}のむすめとして、城下の足輕長屋に父母や弟妹といっしょに暮らしていた。

当時、お喜代は十八歳で、宗仙の屋敷が足輕長屋の近くだったこともあり、井関藤七が何かと出入りをしていたものだから、藩医の宗仙も、たとえば藤七の女房が重病にかかったときなど、めんどろをみてやったりしたものだ。

そのころのお喜代は、血色のよい、いかにも健康そうなるむすめであったけれども、無口で、そのくせいつもにこにこ笑っている、病身の母親をたすけ、よくはたらいていた。

さて……。

十年後のいま、おもわぬ再会をした水谷宗仙だが、こうなってお喜代を家の中へ入れぬわけにもゆかない。

入れて見て、宗仙は瞠目した。

小むすめのころは、どちらかというと太り肉^{とじ}のほうだったお喜代の肢体が、すっきりと細身になってしまい、化粧の気もなく処女のあぶらの照りをそのままに露呈していた顔がほっそりと白く、上品な町家の女房の衣裳を身につけ、しているのだかいけないのだかわからぬほどの化粧の冴えが、

(別人のような……)

と、宗仙をおどろかせた。

「どうして、ここを……？」

「半年ほど前から、二度も、坂本の通りで、先生をお見かけしました」

宗仙が、青ざめた。

お喜代は、何の用事で、自分をたずねて来たのであろうか……。

宗仙が、和田武兵衛を殺害した事件を、もちろんお喜代は知っている。

「御安心なさいまし」

と、お喜代が、

「先生。いまの私は、青山さまの御家中とは、なんのかわりもないのですから……」

「どうして、江戸へ……？」

「八年前に……」

「八年、前？」

「はい。大坂から篠山へ商いにやって来た小間物屋に、だまされました」

「だまされた？」

「いっしょに、大坂へ逃れて、捨てられました」

「捨てられた？」

「それから、いろいろなことをして、いろいろな暮しをいたしましたよ、先生……」

「いろいろな、ことを、な？」

「あい」

「あい」

お喜代は、淡々として、

「いまは、落ちつきましたけれど……」

と、いった。

嘘ではないらしい。

国もとの父母や弟妹にも、

「顔向けのならないことを、したのですから……」

いまのお喜代は、篠山藩の人びととは、いっさい無縁

となったつもりでいる、と、いった。

「けれど先生……」

いいさしたお喜代の眼に、不気味な光りが燦^{きら}って、

「場合によったら、先生のことを、神田の御屋敷へ知らせるかも知れませんよ」

と、いいはなったものだ。

水谷宗仙、愕然とならざるを得ない。

「神田の御屋敷」とは、青山下野守の江戸藩邸である。

そこには、和田兄弟の親類も江戸詰めの家来として奉公をしているし、もしも、お喜代が宗仙の隠れ場所を告げたなら、篠山藩としても、

（だまって見のがすわけではない）

のである。

すぐに、この家と宗仙へ、監視の眼が光るにちがいない。

そうしておいて、一方、どこかにいる和田兄弟へこのことを知らせ、江戸へ呼び寄せる。

和田兄弟が、どこにいても、その場所を江戸藩邸の親類たちへ知らせてよこしていることは、当然といってよい。こうなったら宗仙は、たとえ江戸を逃げたとしても

尾行をされ、足どりをつかまれ、遠からぬうち、和田兄弟の刃に、首をはね落されるにきまっているのだ。

「お、お喜代……」

と、水谷宗仙が腰を浮かせた。

「いけませんよ、先生」

お喜代が切りつけるようにいい、

「こんなことにはなれています。先生に私が殺せるものじゃあない」

「う……」

早くも、お喜代は台所の土間へ走り下り、後手に戸障

子をさぐっているではないか。

「お、お喜代……」

「先生。私のいうことを一つだけ、きいて下さいますなら、先生のことなど、だれにもいいません。そればかりか、これからは、蔭になり日向になり……いいえ、そうなれば、私がいのかにかけて、先生のお身をおまもりしてもようございます」

強まった雨が屋根を叩く音の中で、低い、かすれたお喜代の声が、はっきりと宗仙の耳へ入った。

宗仙は鉢中が、あぶら汗にぬれつくしている。呼吸が荒くなっていた。

「その……その、たのみごと、というのは、いったい、何だ？」

「毒薬を一服、そっと私に下さいまし」

3

翌朝。

宗仙が目ざめたのは屋近くなってからであった。

昨夜、お喜代が帰ってから、宗仙は飯も喉へ通らず、寝酒をあおって床へもぐりこんだが、ねむれるどころではなかった。一晩中、悶々として考えつづけ、明け方になつてから疲れ果ててしまい、ようやくねむりに入ることができた。

というのは、水谷宗仙が、決意をしたからだ、といえぬこともない。

お喜代は、帰りがけにこういった。

「先生。私にだまって、お逃げになろうとなすつても、だめでございますよ。この家のまわりには、ちゃんと見張りがついています」

嘘とは、おもえない。

いまのお喜代なら、それほどのことは、わけもなくしでのけるであろう。江戸という大都市には、金しだい、どんな仕事でもする連中が、うようよししているのである。(女とは、あれほどに変わるものか……)

であった。

昨夜、おもいきって、

(殺してしまえばよかった……)

とも、おもう。しかし、できなかった。

もともと宗仙は小心者であつたし、十年前のあの夜、大小の刀を所持していた和田武兵衛を殺せたことが、いまもって、ふしぎでならないのだ。

それからいままで、和田兄弟に首を討たれるのが恐ろしさに、神経をつかいぬいて逃げまわって来たわけだが、その小心さ、用心ぶかさが、水谷宗仙をこれまで生かしておいてくれた、ともいえるのである。

お喜代は昨夜、くわしいことを語らなかったが……。

なんでも、いまのお喜代は、日本橋辺の真綿問屋の主人の後妻に入り、三つになる男の子まで生んでゐるらしい。

男にだまされ、捨てられて、大坂から江戸へながれつくまでのお喜代が、どのような暮らしをしてきたか、それは、おぼろげながら宗仙にも察しがつく。

お喜代のはなしのふしぶしをたどると、江戸へ来てから、お喜代は諸方をわたり歩き、のちに浅草境内の料理茶屋の座敷女中をしていたところを、その真綿問屋の主人に見そめられた、ようにおもえる。

また、それだけのものが、お喜代にそなわっていたにちがひなかった。

さて、そこで……。

主人は、前妻との間に、今年二十五歳になる跡とりの長男をもうけ、これには嫁を迎え、孫も二人できたそうな。

それはよいのだが、跡とり息子夫婦は、後妻に入ったお喜代を憎悪することおびたしく、これがために、

「そりやもう、筆や口にはつくせぬほどの苦勞をいたしましたよ」

と、お喜代はいった。

後妻になって、すぐに子が生まれたし、五十をこえた主人が大事にしてくれ、その上、店の奉公人を、この三

年の間に、お喜代はすっかり手なずけてしまったという。「ま、あれほどに憎まれなければ、私も、おとなしくやって行こうとおもっていたのですが……ですが先生。私は、去年の暮れに、坂本の通りの米屋から出ておいでになる先生を、ひょいとき見かけて、そのとき、ふつと……」

ふつと、跡とり息子を毒殺することをおもいついたらしい。

真綿問屋の寮（別荘）が根岸にあつて、そこからの帰りに、お喜代は宗仙を見かけ、後をつけて、住居をたしかめたのだ。

そのときのおもいつきは、日を経るにつれて大きくふくらみ、もはや堪えがたいほどになった。

跡とり息子が死んでしまえば、

（私の生んだ子が跡とり息子になれる……）

いまは、このおもいが、烈しい情熱となつて、お喜代を駆りたててゐるのである。

つい、一月ほど前に、お喜代は坂本へ来て、宗仙がまだ、この家に住んでゐることを確認し、昨夜の訪問となつたのである。

「だがな、お喜代、さん……毒薬を人知れず用ゐることは、大変にめんどうで、むずかしいのだよ」

宗仙が、やつというのへ、

「だいじょうぶですよ、先生。だれにも知られず、だれもわからない場所で、うまくつかって見せます」

お喜代は自信にみちていた。
方法を考えぬいてのことで、迷いは消えていると見えた。

どんな方法で、毒を跡とり息子の口へのませるのか……それは知らぬが、落ちつきはらっているお喜代を見ていると、

(やれそうな……)

気もせぬではない。

そして、ついに……。

宗仙は承知をした。

毒薬は、今日の暮六ツに、ここへ訪ねて来るお喜代へわたす約束になっていた。

4

この日も、雨であった。

古着屋の女房がととのえてくれた朝昼兼帯の食事をすませてから、水谷宗仙は、昨日も往診した三ノ輪の百姓・伝五郎の家へ行き、診察と投薬をした。

宗仙が家を出て行くのを見送った古着屋の女房が、家へ帰って亭主に、

「今日は先生、なんだか、とても、さびしそうな顔をし

ていなすったよ」

と、告げた。

「それじゃあ、夕飯には、なにかうまい魚でも見つけてきてあげろ」

「いえ、今日は早いうち、お帰りなさるそうで、夕方は久しぶりで、先生が仕度をしなさるといいましたよ」

「へえ、そうかい。ま、なんだね。あの先生も、まだ四十になるやならずなのだから、ひとつ、いい女房をさがしてあげたいものだ」

「そうだねえ。ほんとにそうだねえ」

宗仙は、七ツ(午後四時)ごろに帰って来た。

出て行くときには持っていなかった風呂敷包みを抱えて帰って来た。

そして、その風呂敷包みを解こうともせず、鍋に残っていた茄子の味噌汁をあたため、香の物を出し、冷飯を食べ、腹ごしらえをすませた。

お喜代は、暮れ六ツきっかりに、宗仙の家へあらわれた。

「先生。毒薬の御用意は？」

「うむ……」

うなずいた宗仙の顔は、沈痛そのものであった。

そして、小さな畳紙に包んだものを、お喜代へわたした。